

知立 弘法さんかわら版

発行編集部

六月になりました。梅雨時ですが、くれぐれもご自愛ください。

二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く―杜寺城郭・幕末史―」をお送りしていますが、今年は名古屋城下町を起点に広がる脇街道についてお伝えします。今月は上街道と下街道です。

★藩道の上街道(木曾街道)

名古屋城下町と中山道を結んだのは尾張北西部においては美濃街道ですが、尾張北東部では上街道、下街道です。いずれも矢田川や庄内川では渡し船を使い、城下町の志水口、大曾根口から進みます。

上街道は小牧山の東を抜けて、犬山城下を通って中山道に至ります。中山道が木曾に通じることから、木曾街道とも呼ばれました。上街道には様々な異名があります。

小牧宿を通ることから小牧街道、小牧宿に造営された小牧御殿に藩主が往来したことから御殿様街道、名古屋城下とつながることから名古屋往還、名古屋城下と犬山城下を結ぶことから犬山街道とも呼ばれました。

上街道は一六二三年から尾張藩が整備した街道です。木曾に尾張藩領の飛び地があったためです。

名古屋城の東大手門が起点であり、東片端を曲がり、志水口、安井、味鋺を通り、小牧宿を抜けて犬山の楽田追分に至り、さらに善師野宿、土田宿を経て、終点の太田の渡しで中山道に合流し、伏見宿を目指します。距離は約十一里(約四十四キロメートル)で三つの宿場を擁しました。楽田追分で稲置街道と分岐します。

尾張藩にとって重要な街道であったため、五街道並みに整備・管理され、宿場や一里塚も設けられました。五街道とは、幕府所管の東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道です。軍事的な理由から、大河にも橋を架けず、升形が多く、二間幅であるなど、五街道に準じた道の造りになっています。

上街道と並置された稲置街道もありました。稲置街道は上街道と田楽追分(犬山)までは道を共有し、そこから分岐して五郎丸を通って犬山城下に至ります。当時犬山近くは稲置村と言いましたので稲置街道と呼ばれました。

上街道沿いにも多くの城や社寺が

ありました。矢田川の手前には秀吉の妻おねの養父浅野長勝が築いた安井城がありました。

矢田川沿いには天平年間(七二九～四九年)行基創建の古刹、成願寺や護国院があります。街道途中の味鋺神社は延喜式に載る古社です。

★人気の下街道(善光寺街道)

下街道も名古屋城下町と中山道を結ぶ脇往還です。物資輸送にとって重要な経路であり、中世には原形がありました。近世になり、尾張藩が上街道と並行して下街道を開きます。

名古屋城下の札ノ辻が起点であり、大曾根口を出て、味鋺の湿地帯を避けて勝川に向かい、坂下、内津、土岐、釜戸を通って恵那の横ヶ根追分で中山道大井宿とつながる全長十五里(約六十キロメートル)の道です。城下から中山道へは上街道経由より約4里長い行程です。

街道名は行先を冠することが多く、地域によって呼び方が異なります。善光寺参り、御嶽講などの旅人にも使われたことから、善光寺街道と呼ばれました。

上街道は尾張藩の公道、藩道であり、公用の荷物、役人の通行優先であったため、庶民は敬遠しました。

一方、下街道は藩の管理下にはない民道、庶民の道です。下街道には宿場も関所もなく、自由に往来できました。手間のかかる荷継ぎ、馬継ぎもなく、運賃も安く、地形も起伏が少なかったことから、物資輸送路として重宝されました。下街道が賑わった理由は、距離が短く、規制が少ないことです。

もちろん下街道にも問題はありました。問屋場や人馬継立ての備えは貧弱で、道幅も狭く、街道には土岐川を始め肥田川、妻木川、生田川などがあって橋賃も必要で、洪水で渡ることができないことも度々でした。それでもなお、公道である上街道よりも利便性で優っていたということです。

下街道の利便性は藩士にも知られており、木曾衆と言われた尾張藩山村家、千村家は、木曾と名古屋城下の往来に特例的に下街道を使用しました。自前で人馬を調達して沿道に迷惑かけないようにしてまで、下街道を使用しました。

下街道の利用が活発になることは、公道である上街道の利用者、つまり旅人や荷駄が減り、駄賃・宿賃稼ぎができず、上街道の小牧、善師野、土田の三宿にとっては死活問題でした。

そのため一六二四年、三宿連名で「下街道の商人荷物通行禁止」の訴状が出されました。藩も上街道を救済するために、下街道の荷駄取扱い禁止、武士の通行禁止などの御触れを再三出しましたが、十分には守られませんでした。江戸時代を通して、何度も訴状と御触れが繰り返されましたが、成果をあげることができませんでした。

★犬山城と東之宮古墳

来月は上街道沿いの犬山城と東之宮古墳についてお伝えします。乞ご期待。



知立 耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。6月です。梅雨の季節になりました。腰痛などにお気をつけてください。朝晩は寒い日もあります。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語を紹介しています。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということですね。

今年も高名な寺院にお招きいただきお坊さん相手に仏教の話をさせていただいています。冗談のような本当の話です。と言って使った「冗談」も元々は仏教用語です。

日常会話に登場する「冗談」はちょっとふざけた話、面白い内容、時に笑えるような会話を指しますが、仏教用語の「冗談」の本来の意味は違います。

仏教では修行に関係ない無用な話を「冗談」と呼んでいるようです。「冗」という漢字には「無駄」「不要」「余り」という意味があります。

「冗談」とは「無駄話」ということです。やがて、仏道修行以外の場でも用いられるよう

うになり、現在の日常会話に登場するような使われ方に転じていきました。

「冗」という漢字にそういう意味があるので、「冗舌」「冗長」等々の言葉の意味もよく理解できます。「冗舌」はよく喋ること、「冗長」は必要以上に長いことをそれぞれ表現しますが、必ずしも悪いニュアンスばかりではありません。

「あの人は冗舌だ」と表現する時には「話が上手だね」というニュアンスもあります。コンピュータや工場設備の分野では「冗長な構成」という場合は「余裕のある構成」というニュアンスもあります。

「冗談」と言えば、ゲジヤレ(駄洒落)、オヤジギャグの類も含まれますが、ツボにはまると大受けしますね。そんな時には「冗舌」に「冗談」を言った人の面目躍如です。と言って使った「面目」も仏教用語です。

人にはいろいろな「面」があります。その「面」の核心部分が「目」です。つまり「面目」は人格あるいは人物そのものの、言わば全人格を意味します。

個人ではなく、人間一般に

当てはめると「人間とは何か」「人間の本质」を問う言葉になります。

「面目」に「真」がつくと「真面目」です。日常用語的には冗談を言わないような人柄を指しますが、「真の面目」ですから仏教用語的には「しんめんぼく」と読み「人間の本质中の本質」という意味になります。

「面目ない」「面目丸つぶれ」「面目を保つ」等の日常会話的な使い方では「世間体」「体裁」「対面」等の意味に転じています。

仏教は欲や執着に囚われないうことの大切さを論じています。その本質を体得できれば、つまり本来の「面目」が得られれば、日常会話的な「面目」は気にならなくなります。

仏教用語的な本来の「面目」の意味を考えれば、日常会話的な「面目」は小さなことで、つまらないものです。世間体ではなく、欲や執着に囚われない「人間の本质」を体得できれば、「世間体」は気にならなくなります。

お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取りください。

ご協力、よろしくお願いいたします。

かわら版編集部：
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955

